

KODAK
LICENSED PRODUCT

KODAK Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



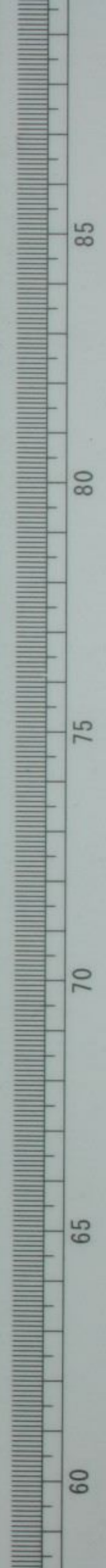
和漢文操

銘類 傳類
帛糸類

文
1971
七



5
686
7



門八
號
卷

東京
區
大
久
保
町
百
拾
貳
番
地
內
堀
池

和漢文探尋之七

銘類

鑑塔銘

並序

蓮二房

今歲享保丁酉秋八月十六日有當先師
亡名之七回忌則構一面向四面之墓取而
祠堂曰文星觀居謚名曰梅老佛歷然則
此塔之厚鑑也圓直一尺一寸而面亦者
殿今之謚名背亦者令誌年與月矣其
地者令造立美濃國山縣郡之輪山之西

大高氏
圖書印

明治三十六年 丁酉 五月 五日
蓮二房藏氏寄贈

686
7

北[△]黃山禪刹之塔頭梅泉庵之西園止乎
山者徒本備水竹之奇麗而先師一家之
菩提寺也抑謂文星意者出一行禪師之
一掌經而天文星者我師之主命也其頌
曰余遇天文秀氣清滯腹文章錦繡成云
然則我師之所遊文章天生文質而非吾
輩之可談會[△]天觸[△]月花之折也則受[△]摩[△]無[△]
神助之撮[△]栗耶祖翁嘗稱我師之文字而
以[△]彼[△]之[△]文章[△]換[△]我[△]之[△]佛[△]語[△]則我[△]者[△]可[△]遊[△]文[△]
章[△]彼[△]者[△]可[△]狂[△]佛[△]語[△]與[△]者[△]人[△]麼[△]有[△]年[△]梁[△]之[△]遊[△]

而文章者慰[△]老[△]之[△]起[△]卧[△]佛[△]語[△]者[△]交[△]人[△]之[△]
好[△]惡[△]則也初社見[△]難[△]彼[△]之[△]遺[△]快[△]了[△]則[△]文[△]章[△]
及[△]故[△]者[△]在[△]武[△]陵[△]而[△]乍[△]預[△]扶[△]以[△]之[△]文[△]庫[△]可[△]任[△]
我[△]師[△]之[△]點[△]換[△]與[△]手[△]誠[△]思[△]此[△]等[△]之[△]遺[△]命[△]則[△]今[△]
懶[△]讚[△]文[△]星[△]之[△]二[△]字[△]而[△]可[△]不[△]題[△]祠[△]堂[△]之[△]面[△]
矣耶梅[△]菴[△]佛[△]之[△]之[△]字[△]者[△]乍[△]師[△]之[△]標[△]號[△]不[△]舉[△]
在[△]世[△]之[△]名[△]數[△]者[△]所[△]憚[△]自[△]稱[△]之[△]橫[△]柄[△]也[△]栗[△]斯[△]
而[△]鑑[△]之[△]及[△]用[△]也[△]人[△]之[△]視[△]之[△]愛[△]之[△]人[△]之[△]視[△]之[△]
憎[△]之[△]憎[△]愛[△]者[△]唯[△]在[△]人[△]之[△]奸[△]醜[△]而[△]鑑[△]者[△]徒[△]本[△]
無[△]心[△]也[△]則[△]爰[△]建[△]置[△]一[△]面[△]之[△]鑑[△]塔[△]而[△]世[△]々[△]將[△]

文相卷七

家我師之本情與也率哉錄先師之行狀
 則入學者延寶之始也采其頌詠山寺之
 紅葉連哉入行呂波之詞而為響響勃之
 尺名者年漸十一之秋也來夏能諧之
 臘則在謂之十六年矣斯而不授世上之
 是非莫為東華西華之名而東者無松鶴
 之侍人度西者踞坑築之不知浦山而潛
 身於憎愛之隅了則置心於虛空之歧矣
 季葛松原年有繕俳諧之皮毛居續五論
 年有調俳諧之姿情歷其外夜話云日記

云十論者增而用白馬之眼藏而論俳諧
 與俳諧之有差別古今事了則從矣儒仙
 老在之庸學者各詩歌連俳之聞出羽當
 時粉成茄子執子之宗近而不令其齒着
 其衣假令可為我行之荷擔人麼古老者
 鉗口新輩者歌耳而憎愛者例之無元在時
 烏巾矣左有者不察建立之意地相手鑑之
 影坊而認虛認實則也爾有則從彼忘此
 從此忘彼也則千歲之先者可拜彼人千
 歲之後者可拜此塔矣夫

銘曰

鑑本無相
 以吹虎嘖
 可魚遊水
 文韋難操
 月見如碑
 交和干溪
 曾家無級
 勸温耳叶

喻物有心
 雲起龍吟
 不身擇林
 錦繡易經
 心間似金
 叶訓與音
 孔行有參
 懲厲人莫

其虛其實

杖鋒凜々

○註曰△之輪山ハ清浦院ニ双帝ニ此國ハ神皇ノ輪
 以神ノ心信チヨリヨリノ神ノ官野ヲ通夜物語
 表ニ出タリ △其黄山ハ北野ノ山ニ實ニ在リ山ヲ雲蓋ト
 去イ寺ヲ大智ト云フ觀見ノ義作守ノ建立ニテ玉浦一
 ノ本山ナリ境内ハ七万五千坪ニテ所々二十景ノ各ヲ
 備フ雲土園ハ寺内ノ栽園ナリ塔頭ハ十二坊アリテ
 梅泉ハ其一坊ナリ其各ヲ下谷ノ清水ト云テ一郡
 無双ノ麗水アリ林麓ハ總テ竹ト云ナリ △一行禪師
 ハ唐ノ高僧傳ニ在テ占文ノ知識トシ一掌經ハ此禪師ノ
 作ニテ僧家ノ才子ヲ養ハフ時ニ其子ノ吉凶ヲ定ムル

三打三十七

三打三十七

書ナリ始ニ命官國ヲ出シ次ニ十二星頌アリテ文星ハ才六ノ至命ナリ題ニ八仙道天文星トアリ其頌曰余遇天文秀氣清聰明知意志意惺々田中女秀身清古滿腹文章錦繡成

其謀星至命聰明佐利學識遇人作事和氣若逢貴福藝相助者定為數魚頭獨白虎辰榜及登名金階玉階之人也若得權及有文武多才乃為上命若遇破厄孤驛及此重者乃多學也成不為書筆文墨之輩必為下雲遊湖海之人上乃手藝術士之下命也按之貴福以下孤驛三九字八仙道天貴星ト云云道天馭星ト云云十二星ノ各自ナリ其六年月日特シクテ

掌中國ヲ美ヘ思ハ天貴ノ吉星ニ遇ヒ或ハ天馭凶星ニ遇フ國ヲ美ルニ師傳アリ細奉スニ暇アラス

●謝天運傳嘗於永嘉西

堂思詩竟曰不就為悲見惠心連即保池塘春

草生大以存工常云世語有神助非吾語云

余論為辨抄難波ノ遺快七通アリ中ニ撰折一牧ハ遺物

賞書ナリ才五ノ書一文章あるか等々の枚向スル

又そのく子福の支考てあるは強し

△文星觀之字ハ撰額ニテ燒桐ニ紺青ヲ入テハ望鏡屠ノ公家字ナリ

筆者ハ加賀金城ニ聞フル富田太椿ナリ本ヨリ馭子各高

ニテ古筆ハ新筆ニ季ニリ或ハ八分韻府ヲ著セリ

△梅必佛ノ之字ハ草跡ナリ和泉ノ青石ニ白河石ヲ以テ

其臺トスニ重ニシテ巨尺餘アリ筆者ハ洛ノ井出一適ナリ
此老ハ井出ノ家ノ嫡統ニテ越ノ福居ニ産シテ洛ノ淳以坊ニ
任メリト卓犖不羈ノ風人ナリトシ
●伊呂波ノ歌入ハ獅子
庵遺稿ノ夜話ニ
あむくはのほりちよもむおほ葉
とつぐはをよふちりちりあおふあしとらし
所坊やうも能^ニ山のきもあそそ秋風と所さり
うりそ我^レ後文のたひをすおほしかくさつとちつと
子^レ並母うをそくひもけあれはうのそくくをそちの
女^レ愛もあそくさやとあり^ト掇スニ夜話ハ祖公羽ノ
遺訓ニ我滅後^レ止年ニシテ俳諧ノ上手モ出キ古々ナリ
宣王ノ其訓ノ評詞ナリ△滕王閣記^ニ勃と尺微余ト女
書生云と尺微余ト八塵部^ニ此月ヲ云ヘリ
△本朝文鑑

十名説、東ノあそふ所と京華坊といひあそふ所ハ
西華坊と京華坊と云ふもそとあり其始ハ東菴集
ト云イ西菴集ト云ル東西二佳ホノ各ニ掇レリトク△侍人モ
子^レ知モ古歌ノ裁入ナカラ^ト不知^ラ火トハ^ハ塊^ノ系^ノ松詞ナリ
△昔白松原ハ奥州行脚ノ俳諧ニテ△續^レ五論ハ^ハ松原行脚
ノ遺訓ナリ續^レ字ハ^ハ松原^ニ續^リトク△東西夜話ト
云ク白^ノ松^ノ日記^ト云ヘル何レモ俳諧ノ附方ナリ△俳諧十論
ハ芭蕉家ノ文綱ニシテ白^ノ馬^ノ西^ノ安^ノ文^ヲ奉^タシハ佛^ノ家^ノ
正法眼蔵ト云イ涅槃妙心ト云キナリ△鑑^ノ景^ノ坊^ハ一篇
ノ結語ナリ掇スニ十論以下ヨリ認^レ虚^ノ認^レ實^ノ三^ハ十^ハ論
一部ノ註釈ナカラ儒^ノ仏^ノ詩^ノ歌^ノノ保^ノ長^ノ野^ノ斷^リテ^ハ景^ノ坊^ノ
二字ヲ以テ例^ノ言^ヲ語^ヲ散^シタル^ハ諷^ノ諫^ノハ^ハ更^ニ三^ハ言^ハス

微中解紛ノ絶妙ト稱スレテ千歳ニ字ハ太玄經ノ取徳

銘解

△魚身ノ對ハ詩經ノ取意ニシテ魚文身ノ天遊ヲ云ヒカ
魚ト身ト自他ニ成ル世等ハ摘抹ノ筆力ニテ格ニ翻轉
ノ絶妙ト稱スレシ或ハ扱林トハ夜向扱木身將陸ト云ル
例ニ古語ノ取意ナリ △文彦錦繡ノ對ハ昔年經ノ頌文
ナカラ難易ノ二字ノ働ヲ見ル △曾孔對ハ顛倒格ナリ
孔子ノ道ハ曾參ノ傳ハ曾參ノ道ハ子思ニ傳フ假ハ子思
ノ名ナリ 梅スレニ世一對ハ祖名羽ニ東華坊アト蓮ニニハ
子思ナレト銘者ノ辭美ヲ演ナカラニスヲ以テ四名ニ
對セル顛倒ハ例ノ常法ニシテ文ニ錯綜ノ絶妙ト稱スレシ
勸懲ノ對ハ字意ノ働ナカラ温厲ノ表裏ヲ尺ニセリト云レ

○漢云此銘と云は實録トテ我師の事ニ多とあり
るも之は流を名し評を心得る所ありしを以て此
の如くして百世の名を以てしむるべきものなり
ハ遺稿の秘記あり也評は命官の古文と評は之
を階玉階の各と名し之を以て破厄孤馭の事と
凶星ノ建云々ト云ル秘術士のおもひありし世を以
我師の事と名し之を以て評の事と名して
之を以てハ此階の大家師ト云之也

瓢銘 並序

天章吹

世間ノ庚申のおとほしむる事とむし視聽言

梁惠王ハ庖丁ノ所佐アハ宣王ノ如ク庖厨ハ遠スト同書
 ニ同語ヲ翻轉セシト等ヲ奪胎ノ絶妙ト稱スシテ論語
 俎豆之古又則嘗眞之矣軍旅之古又未之學也
 ▲論語ニ父攘羊而子證之子曰父爲子隱子爲父
 隱直在其中矣史記桓公曰易牙烹了我子以快
 寡人尚可疑邪按スルニ對ハ羊ニ俎豆ノ孝行ヲ合
 兒ニ鄉食應ノ忠節ヲ顯ハス君臣父子ノ子對ハ更ニシテ
 又ニ意對ノ絶妙ト稱スシテ ▲論語ニ畏天命畏大人
 云按スルニ對ハ公私ニ用ヲ云カラ河豚ト云イ海雲ト
 云ル物名ノ備ヲ見ルニ ▲白馬談笑訓ニ色と好む
 温飽のこくま一なる麦切のこくま一もと豆府名
 ハ和事の所ありて首比弱のこくま一ありと云

△論語ニ山梁雌雉時哉子路共之之喟而作按スルニ
 此一對ハ雌雉ト雉子ノ雌字ヲ云下昆弱ノ連綿ニ對セン
 トテ論語ニ喟字ヲ假ナカラ雌雉ト一名ニ訓シタル也
 摘語ノ絶妙ト稱スシテ ▲例明本傳ニ常撫無絃琴
 曰但識琴中趣何爲哉絃上声云△論語質實勝文
 則野文勝質則史文質極而然後君子也
 ○評云此格と七句十韻一テ文欣韻のせとまこと
 むり子も私の韻礎とゆらひもを南を漢文
 てもゆる陰借ありこれよくねたし能得の平し
 ちりとまろ一を色はく一を押の格よりおとけ
 姐叔の容とくま一常一魚を此馬まと求む
 よりゆり首比弱のこくま一ありと云

ちねやまを謀り文所只椒よりてあらねを以難の
實とあてあしありはと能治の塵よあまひてそと
我の文者こととつあまも

本箱銘

並序

菅師冬

久々此天地と文庫とて中に得ねる事と
かくれいふ物とあつゝる世よりたてしむる事と
あまもてと一帰るより世人とて一あまの
思ふこととていふ事とていふこととていふ事と
あつゝる事とていふ事とていふ事とていふ事と

可千校二毎年の抄書とてあねのまのつたあつた
おもおもちも桂の子名まゝとていふ事とていふ事と
おとあまのまゝとていふ事とていふ事とていふ事と
るやまねとていふ事とていふ事とていふ事と
麗しあまのまゝとていふ事とていふ事とていふ事と
わらわとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と
とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と
はとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と
眠あつゝとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と
あつゝとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

あけぬとあふとさるる

其銘

智を志とほりて度いゆ
 假名と書ふと花形は
 木の五より流をきつりや
 桐の節あき歌やうく
 机と鉢の目とほりてと
 およ花のいろははつる
 魚般くや花柄はけと
 け白く書るよ染く遊む
 受けらぬとさるる代と
 むしにほりてさるる代と

○註曰△平文子下事帰一云碧岩録万法帰一云△蛋雪
 故夏ハ前ニ出タリ △達上ハ六門集ニ以心傳ハ不立文字

▲吾書 邦隆七月七日仰庭日曠 腹中書ラ云

其銘 ▲在子カ蝶々夏之前ニ出タリ ▲野語述説 勸学院 雀
 ハ其求ラマシトハ野語ノ説アリ 或云雀ハ即僕隸各也トモ
 或云学院園中ニ有ク黄鳥鳴ルニ曰非熊四字ハアリ
 △淮南子ニ魯般仕ニ楚王作ニ雲梯攻ニ云 ▲竹田ハ後朝ノ
 細工人ニテ夏ニ和漢ヲ對セシ厚ナリ △傳語拾芥ニむし
 の刺今ハ葉印ト感妻の香化といをその血氣ト
 ○浮云は流と隙見の字にありて 虚ニありて実と和す
 ともいふ流もさるる不と傳師名此和漢の書ハ籍を問ひ
 あらわす傳字の各とせられり也さるる達上ハ邦隆
 といふとよむ人の様うて用括とけらるるさるる
 へまや況や冠と刺との蹟線と削入笑中の刀といふ

一作者と菅中より別々木牛兒と操子と尾城
の八の観と所として書とよく一箇とよくも産
名と万能磨とつりつれ

炭取歌銘

元後ハ謎文ナリ評註
ニハ及ス椰子庵ニ
五寶ノ其一ナリ

蒼とるるはまろく
空と冬つりてく

椰子老人

蠅打銘 五序

崎一秋

おほくそ打物のそお抽とるる。實とるる。双た

とちのひきとるる鉄炮とちのひきた力かておた
をさちひきとちた人と殺したる。とるる。まろくを
かむ。防く。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。
長城と一炸の火は油のちちらひ。とるる。とるる。
仁の二とち。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。
対と。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。
とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。
とるる。政陽殿と種とち。とるる。とるる。とるる。とるる。
とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。
とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。
とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。とるる。

洪範銘 五序

林道明

天子之德... 洪範之銘... 五序... 林道明

天子之德... 洪範之銘... 五序... 林道明

文部省

五

○註曰▲竹取の翁の言又つ万葉ニ長歌アリ奉ルニ及ハスにれく
まよ好歌のつらきありといくそれをいふあり

△撰集お
りきさつりゆりも坊中なるあうは生もト云ニ其詞

ヲ互照シテ次ニ西行ヲ出スキ断續ノ多クナリ△富はん西行

ノ益國ハ益師ノ家ノ寂空ナリ△東坡カ戴笠ニ乗馬ト云ニ

ル雪中國ハ和漢ニ多シ○たそニ文持中ノ事ハ前ニ云アリ

●詩仙叢詠ニ益重吳天雪履香楚地花 ○兼能

發句ニ世ノあつてもさるに何あめやとて哉

○厚云け路を遠集よとていふかといふ事いふあり

さりとえ禄甲成のる伊賀の西林庵庵よゆりて

又福十二箇の再投あるといふは後にもいふ一箇を

いれし道福の夜詠よとていふやねるの道文とて

信向の藤林と論よきも凡國の派船集の

い藤林舎よきとていふ人の信をいふは

いふと古文のききいふあはきといふ自筆の遺文

ありとも我と我といふは時、借路の指よれた

いあつらん威後の選論といふといふといふ

いしきさつりゆりも坊中なるあうは生もト云ニ其詞

何とていふ事いふのつらきありといふは

いせふといふ物事ありといふは

い本曾寺此飛んといふは湖東の孟耶觀といふ

い美塚の名といふはこれ路の庵といふは

い或は武江の春の塚といふは此者の此經冊といふは

羽の香も一後なるは嵐七の舞物とのまぢりのおかち
とがしられおる子の徳又あれはれは一蓬論の用と
とれと也

鬢鏡銘

百何仰

原夫世界之始者無鍛冶鑄物師之業蓋
了共天圓地方也了万物各莫不見質含
德事鼻矣中亦麼謂鏡物者傳儒仲神之
魂而遠照國家之政兮近顯君父之道兮
況向明暮之鏡而男者持鬢之不紊心則
女廣嗜同許之有塩敷様而霽宛起死松



之二葉成月出度御代之媒了矣斯者和
五倫之中了則安麼謂鏡之天下一者矣
抑從正月之重鏡五九添月日之光了則
不失四季折々之等花本者水之成鏡了
身尔者翟之尔歎了孰若不為凡雅之便
飲者但角儒行之孔夫子者七十而從心
所教共建置明德之鏡而若繁之仔達者
不為麼樂而不淫了哀而不傷了程子麼
所謂虛矣不時則可謂孔子無能詰之虛
實矣耶又佛家之教世而高懸置淨玻

文藝卷七
瑤之鏡而令眼^ヤ地獄^ト極^ク衆^ヲ了^ス則^レ八^ノ万^ノ大^ノ衆^ト
摩^五而^一羅^漢摩^身入^一寸^四方^之箱^被照^ト
智^惠之^鏡而^唯心^淨土^ヲ已^心淨^陀去^レ
北^ラ不^遠與^所剗^夫神^國之^天照^皇者^生給^ハ
白^銅之^鏡則^被為^法岩^戸之^神樂^而後^給
于^心咫^之鏡^居矣^在有^者万^ノ之^神遊^連有^チ
面^白俳^優之^歌給^則歌^人連^奇之^家者^不
知^佛語^亦者^供神^酒而^不崇^鏡之^御影^果
耶^在有^入道^者懷^入一^寸之^鬚鏡^而密^者
者^所見^其鏡^了年^者所^美也^指了^額觀^之

漣々波也。鏡之山麼近^ラ則^耻老^面森^之
名^而臨^深而^鬚麼^不接^增而^所觀^儒向^之
實^義探^神道^之秘^密耶^在有^雪且^了仰^花
花^味月^而為^鼻毛^之用^心而^已也

○註曰^{老子}經^{天地}之^間其^猶橐^籥乎^虛而^不屈^動
而^愈出^云橐^籥八^吹華^{ナリ}△^{天地}方^圓八^前出^{ナリ}
△^{天下}一^作一^鏡裏^ノ銘^{ナリ}多^八其^銘古^風稱^久君^父
以下^ノ二^章三^五倫^ノ裁^断ラ^見ナ^キナ^リ ○^在と^集音^と
而^クむ^の後^とも^水を^ちか^から^せり^とや^らの^りこ^いふ^に
擲^ス二^此五^字大^和毛^直名^ノ用^{アリ}ト^云シ^彼各^三水^之鏡^ト
ト^續ク^故二^水之^鏡ニ^テ花^之鏡^ニ非^ス直^以各^三水^成字^ト

以于水ト鏡ヲ隔ル故ニ水ヲ以テ花之鏡ト成セリ若クは貞名ノ
 伊勢物語人ト被知ノ歌ノ千本波ト不ト不ト不ト不ト
 ノ差別アリ但シ厚ト知ト文和詞ニ動アリ△山尊ノ我歌ヲ
 見テ其鏡ニ舞フ夏ハゆきふり子ト出タリ細奉ニ用
 ナレト平竟ハ花鳥ニ寄セテ鏡ノ凡雅ヲ云々ナリ△論語七十
 而從心所欲不踰矩△大學子道在明明徳云△論語
 緇黨紅紫不以爲服註紅紫直於婦人女子之
 服也△論語爾雅樂而不淫哀而不傷云詩經爾雅
 ハ夫婦ノ中好ま喻トワ△大學明德註程子曰遠矣不昧
 以見衆理而應万變者也按スニ此結語程子実字
 ラ語ントテ強テ我水ノ虚字ヲ奉テ明德ト云テ證又
 ト成セル例ニ俳諧ノ意地ト知ヘシ △浄玻璃鏡ハ佛經ニ

出テニ世通達ノ喻ナリト之按スニ此起語ハ眼傍ノ面影
 ヲリノ相ノ一字ヲ形容セシメヤ法ニ隱見ノ絶妙ト稱スレ
 △二寸四寸ト心ノ方オナリ唯心モ已心モ用ト知ヘシ按スニ此二
 句ニ大和ノ貞名各文ニ句讀ノ設アリ是ラ漢文ノ字配リニ
 云ハ被照ノ二字ヲ以テ爲入ノ上ニ置キテ和訓ハ語路ノ
 直アリテ上讀ハ十字ト成リ下句ハ五字ト成ル故ニ上ラハ
 字ト成シ下ラ七字ト成シテ句讀ノ長短ヲ配ヒナリ此等ハ
 大和ノ新制表ミテ例ニ倭文ノ回曲ハ返ルキ故ニ和漢ニ
 音訓ノ差別アリトノ前撰ノ百花賦ニ木瓜花ニ配アリ
 此瓜尼ノ句讀ニ見スレ△唯心モ已心モ淨土經ノ語ナリ前
 アリ△去此不遠モ前ニ出タリ △日本紀乃以手持
 白銅鏡則有化出之神是謂大日靈尊云大日靈ハ

大和集卷七

十九

天照皇ナリトシ ▲岩戸ノ夏モ八咫鏡モ前ニ出タリ ▲齋庭部
 廣成古語拾遺 八千万神於石宮廣戸前奉庭燎
 巧作俳優相與歌舞 俳優ノ二子ハ後書ニ出
 テ滑稽昔ノ優游トワ ▲鏡ノ御影ハ瑛紫ニ在リ天神ノ
 自益ニテ神酒ヲ供ハ色ニ由玉フトフ 押ニ此結語ハ
 岩戸ノ鏡ノ數迎ヲ御影ニ神酒ヲ結スハ菅神ハ
 本言凡雅祖ニテ神妻ノ和光ヲ唱サケシヤ悉六世等
 ノ文法ヲ双箇ノ絶妙凡互照ノ好辭ニ稱スキナリ
 △此れノ字ハ花キメノ時傳有ル時法トシテ此ハそのの
 心カクミキト云ハル所トシテ後藤詠詞 但密を後クハハ
 年と云フトシテ云フ所ノ ○羈旅ニ後ハ云ハル所
 凡そ此ノ年ハハカガキヲ老ヤキ云ハル所 ○今字ノ集カケリ

後ノ義ト云フ所ニハカガキノ義ナク ▲蚤雪
 ノ二句ハ西ノ用ナカク孫康車胤カ字文ニ寄セテ儒佛
 神ノ字道ヲ粉成トス例ニ俳文ノ意地ヲ知テ隼毛ノ
 ニ字ニ看破スヘシ
 ○俳云は詠を虐言ハカシテ大和ノ直名此又證ニモ
 心と云ハル所後ノ二子ニカガキト也昔用ト云ケル
 或和訓ノ字ニカガキノ義ニ長短トシカガキハ
 と直名ノ詠用ト云フカガキノ義ハカガキノ義ハ
 の神と稱スルカガキノ義ハカガキノ義ハカガキ
 此カガキノ義ハカガキノ義ハカガキノ義ハカガキ
 今カガキノ義ハカガキノ義ハカガキノ義ハカガキ
 ノ義ハカガキノ義ハカガキノ義ハカガキノ義ハカガキ

花月のたからけしくさのよもかたあふいさくはか
 らはにんちのあしづきの知とみへてはぬのよの
 こしたるいぢのあつあつは枝をわらわちぢに
 へつとあつ目のあつあつはあつあつはあつあつ
 一まのあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 のちまのあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 のあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 どのあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 凌雪のあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

駿河の国と信ふくく谷とくくをぬかかかかかか
 冠をたさぬかか。穠を昭華と霧とあつあつはあつあつ
 もんは遠原のあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 まれいと美抄所のあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ
 あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

○註曰く竹夫人の抱羞の言信各ニテ卧内ニ有テ遊ル調度ナリ
 或ハ竹奴トモ青奴トモ云フトソ ▲詔習湖ノ名如ク長春
 竹生鳩ノ辨ス天ヲ指テ竹ト夫人トノ寓トス此等傳記
 文用ヲ知レシ△冬美ハ繪張ノ具ナリ倭ニ篋字ヲ用ユ和訓
 ハカクカヒノ意トソ△白雲郷ハ東坡ノ詩ニアリ夏ニ在子
 カ無何有郷ト見レシ▲竹ノりの抱羞竹の中よりあつあつ娘

瓦器傳

河何竜

此も瓦器といふ物と混る流しの物なりて
 その容やうやくその性ありてこれと天帝此もい
 うと非祇教教悉く常めをまじらふ物とを
 ぶきりまじりてれい人の代此酒をたてて暖飯
 作事のおとえい何部常備のふよけりて種も
 いひ地條ともていひつれはふ中族ありまじり
 てもとらんと我々の重寶記といふ器をかりけ
 訓といふとと陶物^土の地各ちりてこれい和訓を

瓦器の二字を用いて音訓の通語なる一とて言ひ傳
 年中いけ傳をいへりたりぬ津や山名戸の常備
 い二瓶のひくると後いふつ一ゆ信所のめをけしけ
 ありまじりて和えのれといふはむとや教の
 ともいふと燃灯佛のほりてい負すれ一灯と
 ありてあり十二灯といひ万灯といふつれけ物
 ありてありありはく物事の運業へはめをいふ
 の類は月と移いよありて入の暇ありてい銀
 ありとがさうていこれなるの業をいふとてい
 一燈のほりまじりていなるの業をいふとてい

古人のついでにちかきくくといふ一ゆいの響を
 系那のといふとこもなれはらしくなれりといふと
 係をいふ際系那のいふおまはらあはれといふ流
 一二月といふころあつてはるるの種とあつては
 ちかきくといふころあつてはるるの種とあつては
 あつてはるるのいふころあつてはるるの種とあつては
 春秋のくまもるはるかあつてはるるの種とあつては
 の流とあつてはるるのいふころあつてはるるの種とあつては
 二分饅頭の威光よはるるあつてはるるの種とあつては
 有は非はあつてはるるのいふころあつてはるるの種とあつては

此を一索いふはわくあめ灯籠のるはるかといふ
 葉のくまもるはるかあつてはるるの種とあつては
 ちり糸を鴨川の流しとあつてはるるの種とあつては
 かりあつてはるるのいふころあつてはるるの種とあつては
 南京の漆所もいふ補あつてはるるの種とあつては
 中常とあつてはるるのいふころあつてはるるの種とあつては

○註曰△伊部は前より常滑は尾張より措鉢炮烙ノ類
 ノ名所ナリ△岩戸園ハ明ニ出タリ △授決経ニ時ニ有
 貫チハ一灯ノ歌作ニ後世注本ニ特勝ニ諸灯ニ云 ●詩仙
 叢話宮詞ニ戯ニ君一石酒ニ忘ニ事ニ百年身ニ△園志
 張遼字文遠勇力過人莫不怖者曰遼末則

小兒止啼之張遼上霞頭ハ例ニ強弱ノ証語ナリ
 ○漢云け傳を例の寓言なり。彼もろふを瓦器の割る
 ろ神祇教教亦可常ノ使らむおと親をん
 筆に笑言の術ありといふもききし思神のちこ
 あもしきけおののゆに服節をよるふあり
 作者を爲云の廣端よき。河本申の駿人あり
 こつこ五蘭子ト稱するといふ

葉然傳

東菴坊

これ心重しやまへ人ありし。酒の濁が清しあり
 と花とひのとのと。松尾をけけ付るふありて

我々のむ我もく葉人の地教よ敵して各の地
 あらんととるふ。ちよりとも姓を執して各の
 葉然ともとゆ。たれい音語を大和の法わちあり
 万葉の付をた久念ともふ。一はるを世ととれ
 ろ。ゆるの坊の掛花とありし。字ゆれとありて
 一人をらりけして。おあをよ。二瘦かきちり。三座よを
 ろ。三座よをよ。一はれ。二は物と。こつこ。さ。あ
 ろ。本をたひ行を。くら。地ねと。は。い。隣のをね
 こ。も。さ。い。さ。ら。で。む。を。夕。息。の。き。さ。い。ら。ち。や。を。ね。と
 白く。笑。ら。り。と。は。あ。う。お。さ。ひ。一。今。や。け。お。の。を。變

とよかしのふらふらとよかしのふらふらとよかしのふらふら
 けふて境界さうに尻をながくするあはれいふあはれ
 時をたうさふまはれおろし時をたうさふまはれおろし
 許由の水飲とあはれとあはれの本の枝をかきくたう風
 かかきとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
 例の斗指するあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
 のりり。昔花の浦北るさうとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
 んゆまるとさう北の里へはれれ草の浮名とあはれ
 し世とほくねんとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
 美しあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
 ちむも又むるあはれ

○註。回△音語ハ八。ツ通ヨリ誤文ノ名ナリ。砂鉢ト伝
 之線ト云イ。蟬ト云イ。錢ト云フ類ハ音即訓ニシテ八美
 中ノ音語ナリ。都久念トハ万葉假名ニシテ都久ト築ト
 ノ两用アリ。大和詞ノ後勅ニ見レハシ。撰体書おゆぐと坊
 直下ノ詩ニ據リトフ。飲中八仙詩ニ本字白一斗詩而篇
 此れノ竹の詞ヲ採リ。△本字白滝見因ハ世ニ多クハ流
 在。牧童重之遙指。杏花村△神仙傳。尺金壺玉瓶之壽。云

○海は傳を交記して論語の自立の二字とて物
の一事と訓練をりたるに筆然の音語よりる心
此各よりひるをきり例のたうく例のさひくうに
素人と突殺とてふ一けぬを素井がうて所名
と様うとふと君の没後へおんて濃の岩崎
と隠遁をりてな

讀隱逸傳

佐其玉

むい^{クルス}物^本柄^四の奥^北奥^にを^おお^のの^以以^てと
は^まま^新新^故故^とと^脈脈^とと^平平^けけ^るる^人人^とと^海海^をを^此此^隠隠^者と
を^了了^とと^大大^きき^らら^ああ^やや^まま^りり^せせ^まま^しし^てて^今今^のの^世世^にに

んを^素素^淡淡^のの^比比^{より}より^再再^ああ^れれ^くく^九九^尺尺^二二^寸寸^七七^分分^のの^長長^也也
ら^りり^孫孫^にに^いい^ひひ^しし^てて^耕耕^をを^ここ^つつ^てて^いい^ふふ
合^ふふ^来来^北北^にに^婦婦^をを^いい^はは^るる^のの^かか^はは^とと^打打^神神^のの
一^念念^をを^起起^のの^まま^にに^ああ^らら^るる^をを^講講^せせ^とと^終終^るる
隠^遁遁^をを^しし^てて^世世^をを^捨捨^つつ^るる^をを^天天^竺竺^にに
△^〆〆^のの^柄柄^子子^のの^まま^りり^しし^やや^{あり}り^頼頼^くく^をを^考考^すす^中中
し^まま^のの^風風^とと^なな^りり^二二^三三^月月^のの^妻妻^とと^てて^ああ^るる^月月^夜夜
の^ゆゆ^いい^なな^達達^とと^なな^れれ^るる^〆〆^虚虚^をを^此此^にに^書書^しし^てて^ああ
ら^うう^〆〆^松松^をを^北北^をを^まま^にに^まま^にに^まま^のの^らら^うう
の^まま^もも^ああ^れれ^んん^秋秋^のの^かか^つつ^のの^まま^もも^ああ^りり^しし^をを^能能^くく

の隠者も或と兼人ともいふも其の意を
 その兼耀と稱へある所を唯心の暖味に
 かくれあるを己心の暖味といふありて和漢
 人のさしあつる隠逸傳とあはれまて今略也

○註曰これく州粟極北よりとてさしあつる
 入りの所ありあつて粟極北より折ちりてさしあつる
 こといふ人あれりありて一曲脈論語より雜飲其
 段ノ取意なり △庭ノ柑子ハ粟極野ノ結文ナリト云
 へんものさる人なりとていふはやうき柑子と云へ其歌
 ノ数入ナリ △俳語拾芥むじりより我る人唐人の事
 ありとていふ唐人の事ありとて詞ハ其意ありとて

とありていふこと一行おろりてさしあつる兼人
 して多く行成ノ墨は繪ナリ○古今集ノ秋のまきと云
 のるきやとありひりてとてとちとてはより △冬雲
 兼耀トハ盧生カ故交ナリ前山ナリ△唯心己心の觀經ノ
 詞ナリ前山ナリ

○評云いかにいれく村のぬれ極のぬれよとて
 和漢の隠者のさしあつるをいふ儒者の事あり此
 其勝と云ふこといふこといふこといふこといふこと
 取捨の事いふこといふこといふこといふこといふこと
 と云ふ古文の例ありありとていふこといふこといふこと
 て其の廣くいふこといふこといふこといふこといふこと
 ありて兼人時代の風貌ありとていふ

兼耀

十一

ふくれまじ。原甲とはなもれ名のかつてふつとくを
常袋の中にもかくしるる由ありて殊の事
とくありあつてかたはらに揮ふありある名
の根とわかれ果を何れの事かといふは
くちらわかく事蹟の事たすむるに
一類もあはる事に行ふ事のみか
今よこさへく事かたか中か
しる秋のゆをなとけはめつとま
あるらられたる事かたか
らりては讓位の事かたか

院の所取の事かたか
はくもあつてと塵のけ
の事かたか
とまはら
拂ふ事かたか
くるぬの事かたか
い銭もかたか
つては
まふこと
廿四の事かたか

元禄

人も兼るのさうりあはれいふまにほよのちよん人
さうりあはれいふまにほよのちよん人

○註曰・三賦詩奉帝平明金殿同云世詩八宮女奉
公ノ様ナリ帝ト竹帝トハ通用トソ○万葉物集の物子
のさあめのおさくしきいささくさくさくさくさくさく
△老子経和光同塵云 △源氏物語平八才ニノ天ノ子
歌ヲ取テ各トセリトフ △物集秘傳抄ニ授摘帝古キヲ
ニ賢シテ麻病ノ妙業トセリ △古硯銘山豈非野野
而鏡有文乎 ○胡詠さあめり此律のさあめりさあめり
けいさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さあめりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さあめりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さあめりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

さあめりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
向ハ之則ニ隱逸ノ起結ト云イ多ニ和漢ノ文法ヲ較スル
タル此等ヲ鎖詞ノ絶妙ト称スヘシ△昼譜寒山公帝
ヲ携フヘ拾得ハ巻物ヲ持ル細草スルニ及ス●寒山詩可矣
寒山道而無車馬蹤云△四瞻圖ハ豊于ノ信ニ寒山
ト拾得トシ昏テ虎モ瞻リ居ル様ナリ豊于莫ハ前ニ出
○傳云世傳ト云ルハ例ニ能清ノ寓言ナリ
況もさあめり人向の浮沈ナリ王公后妃を交りてあ
あさね宮女方士もさあめり此有りと況練よりさあめり
一篇の結文さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
又瞻の論ノ語とむさくさくさくさくさくさくさくさく
法さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

○吊糸類

浪化公終事記

東華坊

一神時月九日と申す
けしと申す
あきと申す
そのと申す
そと申す
そと申す
そと申す
あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

あつてもと申す

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dense, flowing style across approximately 12 lines.

大澤巻七

七

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dense, flowing style across approximately 12 lines.

七

ことばをいふにふのしくはなほしつらにたれ
 としなむはぬしやあしつはなと夫しつら
 斯文とちるあつらふしつに越ぬ人れあはれ
 さふれや十もあつらふしつに越ぬ人れあはれ
 てかうらちれはれとむくはつらつらつらつら
 らふとわつらつらつらつらつらつらつらつら
 きらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 とちつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 あやあつらつらつらつらつらつらつらつら
 湯つらつらつらつらつらつらつらつらつら

世ふかうあつらつらつらつらつらつらつら
 の二つをえとくわはれれとつらつらつらつら
 ちつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 へつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 ちつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 月ををほつらつらつらつらつらつらつら
 とつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 とつらつらつらつらつらつらつらつらつら

世あう△まぬのあかりよぎーかろーるるれ
 うとありーきりーはるるれしは子とらぬさうとあや
 はらうとあひあさうーはむげうと世のあはひし
 ちまれはるるさき葉玉樹の枝はるるありせば
 花のあはれ人くくを月ひあひはるとたのしみく
 きれりきかげをさひあをね

○註曰△浪化君ハ東門跡ノ連枝ニ越中井波ノ瑞泉寺ニ住シ玉ヲ
 官号ヲ應真院ト云ク標号ヲ應々山人ト云ヘリ示寂ハ
 元禄十六年癸未ノ十月九日ナリ ○行末ヲ云クはた
 ち人あつゝさぬの浦への舟をればはるるあはれさう

△河明本傳佛酒中下ニ玉弘ト云テ以テ重陽ニ酒ヲ贈レシ事

アリ△采花和譜あうー七河園梨もまうてきぬのーあり
 △金沢ノ別院ハ安江町ニ在テ井波より十二里ナリ△親方ハ金沢
 ニテ津田家ノ智海君ナル故ナリ○はるる相奎ガやさうしは
 春吹むさふゆめさうハや秋くゆくとさひさうとをれしとあり
 中秋とハ子字ノ寄ナリ男子ト女子トニ方アリ △中しとあり
 奇書詞ニ云クさき古下ノ △電草ハ別墅ノ名ナカラ伊勢
 万子ノ標号ナリ世ハ金城下ニ文遊武備ノ名ヲ傳テ祖翁ト
 頗蓋ノ盟ヲ残シ先師ト忘年ノ交ヲ結リトソ○枯尾花集
 祖翁ノ難波ニテ病中吟ニ旅ハまへしるるを秋前とけり
 ちくゝとあり△風雲ノ詞ハ謝天運カ澤泊ノ遊情ヲ採レ
 ニヤ惠遠傳ニ尋レシ△向宗内ノ改悔詞ニ難行雜修ノ志
 ヲ振り捨テ唯一心ニ阿弥陀如來ヲ頼ミ奉リトアリ難行ノ

二字ハ一字ノ季語ナリ△さくらハ樹樂ナリ歌書ハ戲言
ヲ云ヘリ△論語天之未喪斯文トハ彼所ハ儒法ヲ云ヘル所
ニ師諾ヲ云ヘリ然レハ世語ニ類回カ早世ヲ言テ喪吾ノ教
ヲ取意セルニヤ△菟花坊ハ洛陽ノ南ヲ十坊ニ分ル其ハ一
ニ時ノ會ハ長者町ノ去來亭ナリトフ△法師ト東花法師
ナリ同ク祖云羽ニ具セラテ越ノ行脚ノ約束アリト云據ルニ
其比ハ先師モ七七ハノ年ヲ有碓碓波ノ撰集モ先師
ノ俳諧ヲ擬ヒ玉ハト去來ヨリ内談ノ断アリ其状ハ例
遺稿ニ残レリ○万葉人九辞世ニ召ル所ヤモウ此の
本あるよりの浮世の月と云ふと云ふは山端トハ便利
伽羅ヲ云ヘリ并波ヨリ西ニ當レリ△有碓海ト碓波トハ
一集ノ前後ナリ序者ハ洛ノ去來ナリ△此のむねハ万

西撰ヲ又類ノ發句ナリ○此れそのむねのむねナリ前ニ
出タリ△かたふい荷擔テ歌書ノ詞ナリ△ちとやまゝと
壹早ナリ真名伊勢物語ニナリ○真名草カ余ニ悉録ノ
歌アリ前ニ出タリ其邊ハ東門神ノ墓所ナリ故ナリ△朝雲
暮雨ハ向字ハ神也興ヨリ亡後ノ面影ヲ言テ言テ梅ニ
世一段ハ越ヨリ都迄ノ名所ニ寄セテ比ハ十月ノ九月トハ都ハ
花ノ返咲ト云ヘリ真名草ノ凡ニ計言ノ騷ヲ云ル古歌採言
モ古詩ノ摘語モ此等ヲ裁入ノ絶妙ト稱スレ○昔ハ之類
等々ハあつたことばをいふもあつたことばをいふもあつたことば
をいふも○俊成娘等にあつたことばをいふもあつたことば
をいふも△モロ守字ノ寄セナリ古歌ハ
尋シ△松江ハ都ヨリ漆ニ来レル者ノ乳母ナリ其比ハ七十

舞ノ老姨ナリトフ ○蘭首岸山ノ對ハ前ニあり△淨蓮
 社ハ井波ノ店外ニ在テ俳諧ノ角莊ナリ祖翁ノ無縫塔
 アリトフ△淨風坊ハ十坊ノナリ東六条ノ道ニ云リ○次テ
 ノありトフ△蜜ノ縁語ヲ歌ノ詞ニ多ク夏ニ住ト須ト
 ノ寄セナリ △善史ニ芝蘭玉樹トハ兄弟ヲ稱セシ詞ナリ
 ○淨云け又と身もちれ嬖燕とウアト先師ノ一代ニ命也
 わちりとおふーいられ桐子屋の遺稿といふもくを達
 のち通とてくらりてさちれすいふに到れし中
 駒方子の花ありて今に終正記のにはありし事竟れ奉
 入迄弱のち論せそ花の略とてひるま原より雲の光と
 ぼくとして霜のまはれ君
追善集ナリ終まよのたと熟沈りてわくわく
 能得のきふととて昔てむいふりわきの遠いあて

能得といふ年の新話とて一巻の戯言あれといふあつり
 今いふいふ一とてあつたのよと傳はれ中お話の
 艶詞とてその松をも市の漫話とていふて湖月
 の話もあつたもまこれをも傍のきもよとていふと和歌
 七巻はとていふかといふ能得の美言とあつたか又七
 年とて虚言の信はともういふきもいふとていふと津のけい
 中事とていふお話とて明かなの信とていふとて病中
 買の愛花ちり中とていふとて七巻の愛花とていふとて
 ちりていふとて花の美言とあつたもいふとて書とていふ
 あつていふておれの姉君といふとていふとていふと
 和歌の悲話と能得の微言とていふとていふとていふと
 終とて折の連枝といふとていふとていふとていふと

この文は辨換のたふしを歴々の例めかへるべきに
ついで去年の秋ちりうを巻第のふれし歴々の端も
又書とけしつれさうとつけたる歴孔達天さり
と云はれりやと傳の文籍といふ類の豔曲の文書あり
て尋ちた書と云ふことありと云ふも今終まら
ざりしやうにたかくあられし未練の字をのけ豔
よまらひし耶那にあゆむことまらひし本朝の世
よえりおとせしつれさうをたはのり第のまらひ
と今の文持に再撰して辨換に當用の字といふ
まらひしつれさうをたはのり第のまらひといふ
のまらひをたはのり第のまらひといふ例の文書
のまらひしつれさうをたはのり第のまらひといふ

辨換をたはのり第のまらひといふ例の文書の
左切ちり世にと一部のまらひありしこと

雲鈴法師行状記

蓮二房

そ傳くは雲嶺法師を奥州南部の素行て
本名家の侍部よりつら馬の歴世といひ
茲に武陵へ雷ね子と云ふ中比を湖東へ
ふを井の社といふふ傳もあはる傳もいふ
ゆとよのり色と云ふまらひを鼓沢の傳るはこれ
るし年と云ふものよりまらひかた。欽中の謫仙

一やとてはゆふとさきよれあはしははたはゆの
 くよとらねくせし詞のまらあよ。裏の折はむ
 おあへもふらあまのちちと楠の節あはる
 あまのさあまの木の直あたるしほしあ
 の情あはるはてはてえ祿の中はあはは
 へんとちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま

秋のそくひあはるはたのくせははるひは
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま
 一葉とあまのちちとあまのまはるまのま

7 だ花粉子屋の木のつらぬき葉のつらぬき
 おちゆもなると越上郡のつらぬき法後の調
 こるもあつらひら[△]はつらぬき[△]のつらぬきとある
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 と[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 鉄板とつらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ちるもあつらひら[△]はつらぬき[△]のつらぬき[△]
 油のつらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]

尊保のつらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 あつらひら[△]はつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 二月二日の早且し繁らつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]
 ら[△]つらぬき[△]のつらぬき[△]のつらぬき[△]

息のきしむむなとあかきかはさしほろいふるんしん
 しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
 せ。かりりとあめせい二月二日家
 んかしてんぬんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
 のらあせよあめしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
 とあせよあめしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
 づあせよあめしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
 ねるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 終果のちんぬんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
 ーとれしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

~~~~~く権化の  
 奇特あんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
 路の渡吾仲の墓誌又と後と~~~~~也

○註曰雷柱子の武ノ其角カ標号ナリ或ハ雷子ト云リ△五光  
 井ハ湖東ノ中野ノ宿ニ在リ第阿佛ノ山居ナリ△楳△楳△楳△  
 △戸山ノ白蓮社ノ詞△次△洞明△出△々△存△や△洞明△傳  
 △五△鼓△次△掌△五△斗△米△不△屈△腰△解△印△後△而△故△郷△  
 △云△●飲△中△八△仙△詩△臣△是△酒△中△仙△云△其△註△此△天△上△謫△仙△人△也△下  
 △云△り△謫△上△流△罪△ノ△事△ナリ △史記△夏△士△之△處△世△辭△言△君△雖  
 在△在△中△其△先△立△見△按△之△此△對△八△右△義△雖△淺△語△ヲ△和△ケ△テ  
 捕△鱈△ノ△傳△語△ヲ△對△セ△ル△事△ト△云△イ△淳△ト△云△イ△包△ト△云△イ△曲△ト△云△ル  
 字△對△意△對△ハ△更△三△言△ハ△ス△雖△ト△鱈△ト△ノ△自△他△ヲ△對△セ△ル△格△ヲ△轉△對△





金曰木舌上云鈴之鑿三木欽ノ釈又ラ假テ天下ニ俳道ヲ馳  
 行ク徇人ノ喻ナリ迅雷ト法師ノ後鋒ナラウ雲下鈴ノ郷音ト  
 ○便云けむとせ幸此史録トトハ師の没後と云ふ事や  
 事ニ舟車の妙ありし様と一ツツ桐子なるの遺行と  
 なるにあり付の遺話ト他行トナリ我宗トシ人好此  
 宗近ありて西ノ事ト羨百人ト扣帳ト云ふ事ト一ツツ  
 あつまらぬ事と云ふト一ツツ國守國ト之越路の軍ト云  
 の如借と云ふ事あるまじと天下ト云ふ事あるまじ  
 な事と云ふ事あるまじと云ふ事あるまじと云ふ事  
 行人あり我行人ト云ふ事あるまじと云ふ事あるまじ  
 子有と敬叔と車此轍ト云ふ事あるまじと云ふ事あるまじ  
 へ越前ト云ふ事あるまじと云ふ事あるまじと云ふ事あるまじ

此世行人の終るもいふ命と云ふ事と本朝文選ト云ふ事  
 此世の列傳とあげて東蒼行人ト云ふ事とこれ傳中の  
 今意敷ト羨里ト云ふ事と男ありていふ事と羨此世は  
 一ノ西蒼行人ト云ふ事と一ツツ行を仲人の解きた  
 事トも羨里トと自稱の事ト云ふ事と云ふ事ト云ふ事  
 こと此世あるまじと云ふ事と同胞の事ト云ふ事と云ふ事  
 蓮ニと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
 といふ事と云ふ事と顔回ト云ふ事と不幸と云ふ事と阿難の  
 説經の内意と云ふ事ト一ツツ桐子庵の遺行と云ふ事と  
 云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
 終ありし事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事  
 の代りて云ふ事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事

到東の曉よりりて坐臥ま七心の自在なるはこれ僧の  
酒色にあらずいあらずかく僧の優游と云はれり也  
和漢の流逸よりあらず市中の大匠と云はれりて  
の八仙の詩より酒中の大仙と云はれり也

茶之田并万靈文

渡部狂

南無之界万靈無貴分無賤分有縁摩無  
縁摩從儒佛老莊之聖冥至詩歌連俳之  
亡者迄旅霖蓮葉一枚而不厭獅子庵之  
侘者不重于抹香之臭分不生於宿禰之

花分一言芳談之不事欠無則為寐分爲  
起分尽分俳優而不包文採一部之虛實令  
懺悔学者辨之所以矣懺悔余者誘引滅  
無量罪與哉相謂俳諧之馳走者不冷素  
麩分不飾團子分煎茶者入遇名花輪遠  
而茶漬者面々之減次才也斯言則乘佛  
於之味線而厚似口而厚馳走共言諧者  
謂孔子之一藝居謂叔氏老家之口過居  
花咲一體万用則實成万法一理與好此  
故俳諧者令贊談笑有諫笑言有道了也

去言語之遊者認虛認實人之假令抑  
 下我身而直人之草履共言則為似瓦器  
 置銷而振舞針之和物果有者認一言  
 之實而不知万物之虛故也不實之實與  
 不虛之虛者兩為一致之秘法厚哉  
 孰中俳諧師者常欲搜仙家之迂詐崩儒  
 行之真言譬則如為大名之仰人之不惜  
 孔子兮不泥和如兮墨花兮毀身兮知其  
 日其時之變則付檀那之核嫌而欺其事  
 此事欲是以論語尔麼謂君子可欺居傳

語尔者謂詞之遊敵歷所設者所謂滑稽日  
 之贊和綴五倫而通味也今夫謂懺悔之  
 大秘事乃者以度於文操之選場而註者  
 與評者之虛實也今歲用椰子窟之戶而  
 歌撰例之草稿月忽有二人之客而鶴髮  
 之叟謂身有仙居黃衣之用謂博望司歷  
 博望者實麼註者回而其面藤敷身有者  
 何樣評者類而其容危矣率願好思儒仙  
 之万卷則昇鉢羅山窟之撰集尔麼上扉郎  
 鏡而阿難融入於鑰穴而以如是我聞之

四字擴又殊番以見之智惠之顯觀音勢  
 至之通力兮其餘之天人麼毫王麼下在  
 涅槃像之繪其後無為達人鼻矣于然面  
 儒行之沙汰則遠乍刪詩正樂近至自撰  
 之論語而以述而不作之四字竊比於我  
 老彭與者曰竊兮曰我兮爰採給一代之  
 虛實則行人違者認例之實字而為指定  
 高大夫共老與彭者寓二人之面影而所  
 謂神變權化之師也故儒家之七師麼  
 行之七佛麼可知有名無相之證據人也

物而瘧叙如孔子之文而令穿鑿證人之  
 名判則為似折檀林咄之中而詰言葉之  
 散季以耳於聞万卷之表以心知一字之  
 衷了哉于時身有仙麼博望司麼笑々頰  
 合而不諱一部始終之將折急度演茶漬  
 之一礼而傳璧者乘甄子之馬則鳥有者  
 乘茄子之牛而飛去西之大虛了矣享保  
 丁未秋七月盂蘭盆日狂等噓之輪川之  
 流效源自供養之摸樣而和兮漢兮連詩  
 兮誦歌兮斯者吊駒七之跡歷兮將所存

此世一人磨<sup>モ</sup>磨<sup>モ</sup>世<sup>セ</sup>之<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>朝<sup>チ</sup>之<sup>ノ</sup>露<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>稿<sup>カウ</sup>妻<sup>セ</sup>  
之<sup>ノ</sup>影<sup>ニ</sup>兮<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>各<sup>ニ</sup>狂<sup>キヤウ</sup>言<sup>コト</sup>綺<sup>キ</sup>語<sup>コト</sup>興<sup>キヤウ</sup>也<sup>ナリ</sup>

○註曰一言芳談聖光上人詞<sup>ニ</sup>遊<sup>ユ</sup>世<sup>セ</sup>之<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>とあるは<sup>ハ</sup>世<sup>セ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>カ</sup>り<sup>シ</sup>もの<sup>ナリ</sup>也<sup>ナリ</sup>  
古語拾遺之取意ナリ前ニ出タリ△非<sup>ヒ</sup>華<sup>カ</sup>經<sup>キヤウ</sup>慙<sup>セン</sup>愧<sup>キ</sup>懺<sup>ソウ</sup>悔<sup>クワイ</sup>滅<sup>メツ</sup>  
魚<sup>イサ</sup>是<sup>シ</sup>罪<sup>ツミ</sup>云<sup>フ</sup> △花<sup>ハナ</sup>輪<sup>リン</sup>遠<sup>エン</sup>ト<sup>ハ</sup>女<sup>メ</sup>未<sup>ミ</sup>以<sup>イ</sup>五<sup>イ</sup>ノ<sup>ノ</sup>印<sup>イン</sup>ニ<sup>テ</sup>義<sup>ギ</sup>海<sup>カイ</sup>深<sup>シ</sup>ニ<sup>テ</sup>莖<sup>キヤウ</sup>上<sup>シヤウ</sup>長<sup>チヤウ</sup>  
ノ各<sup>ノ</sup>産<sup>ノ</sup>ナリ △論<sup>ロン</sup>語<sup>コト</sup>言<sup>コト</sup>語<sup>コト</sup>宰<sup>サイ</sup>我<sup>ガ</sup>子<sup>シ</sup>貢<sup>クワン</sup>云<sup>フ</sup>四<sup>シ</sup>科<sup>カ</sup>ノ<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>我<sup>ガ</sup>  
ナリ<sup>ナリ</sup> △史<sup>シ</sup>僧<sup>ソウ</sup>初<sup>シュ</sup>傳<sup>デン</sup>優<sup>ウ</sup>子<sup>シ</sup>孟<sup>メウ</sup>珠<sup>シュ</sup>以<sup>イ</sup>常<sup>ジョウ</sup>以<sup>イ</sup>談<sup>タン</sup>笑<sup>シャウ</sup>詼<sup>キヤウ</sup>諷<sup>フウ</sup>△優<sup>ウ</sup>旃<sup>テン</sup>  
贊<sup>サン</sup>善<sup>ゼン</sup>及<sup>キヤク</sup>笑<sup>シャウ</sup>言<sup>コト</sup>然<sup>ゼン</sup>合<sup>カフ</sup>大<sup>ダイ</sup>道<sup>ダウ</sup>云<sup>フ</sup> △涅<sup>ニエ</sup>槃<sup>パン</sup>經<sup>キヤウ</sup>佛<sup>ブツ</sup>法<sup>ホフ</sup>附<sup>ブツ</sup>屬<sup>ブツ</sup>  
國王大臣有<sup>リ</sup>九<sup>ク</sup>檀<sup>タン</sup>那<sup>ナ</sup>△阿<sup>ア</sup>含<sup>カン</sup>經<sup>キヤウ</sup>預<sup>ヨ</sup>知<sup>チ</sup>接<sup>ケツ</sup>婦<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>接<sup>ケツ</sup>ス<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>

取<sup>ク</sup>諫<sup>ケン</sup>者<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>互<sup>ニ</sup>美<sup>ミ</sup>互<sup>ニ</sup>詛<sup>ソ</sup>諫<sup>ケン</sup>唯<sup>レ</sup>度<sup>ニ</sup>主<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>行<sup>フ</sup>之<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>孔子<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>語<sup>ノ</sup>  
ノ取<sup>ク</sup>意<sup>ニ</sup>ナリ △論<sup>ロン</sup>語<sup>コト</sup>君子<sup>ノ</sup>可<sup>レ</sup>欺<sup>ラ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>圖<sup>ル</sup>ト<sup>ハ</sup>宰<sup>サイ</sup>我<sup>ガ</sup>子<sup>ノ</sup>及<sup>キ</sup>言<sup>コト</sup>  
ノ巧<sup>ク</sup>ヲ<sup>レ</sup>責<sup>ム</sup>ル<sup>ナリ</sup> △遊<sup>ユ</sup>敵<sup>ト</sup>ト<sup>ハ</sup>双<sup>ソウ</sup>帝<sup>テイ</sup>ノ<sup>ノ</sup>詞<sup>ノ</sup>ヲ<sup>レ</sup>物<sup>ヲ</sup>諱<sup>ヒ</sup>テ<sup>レ</sup>遊<sup>ブ</sup>フ<sup>ナラ</sup>云<sup>フ</sup>  
ヘリ<sup>ナリ</sup> △按<sup>ア</sup>ス<sup>ニ</sup>佛<sup>ブツ</sup>談<sup>タン</sup>師<sup>シ</sup>以下<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>詛<sup>ソ</sup>諫<sup>ケン</sup>ノ<sup>ノ</sup>意<sup>ニ</sup>ヲ<sup>レ</sup>汲<sup>ム</sup>テ<sup>レ</sup>漢<sup>カン</sup>ノ<sup>ノ</sup>武帝<sup>テイ</sup>ヲ<sup>レ</sup>  
諫<sup>ケン</sup>ス<sup>ル</sup>事<sup>ヲ</sup>方<sup>ク</sup>朔<sup>シヤク</sup>牧<sup>ボク</sup>臯<sup>オウ</sup>ヲ<sup>レ</sup>面<sup>ヲ</sup>敷<sup>ク</sup>ヲ<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>ル<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>畢<sup>ヒ</sup>竟<sup>キヤウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>例<sup>レイ</sup>ノ<sup>ノ</sup>  
面<sup>ヲ</sup>通<sup>ツ</sup>吐<sup>ツ</sup>ナリ △大<sup>ダイ</sup>論<sup>ロン</sup>仏<sup>ブツ</sup>經<sup>キヤウ</sup>ノ<sup>ノ</sup>選<sup>セン</sup>場<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>行<sup>フ</sup>林<sup>リン</sup>精<sup>シヤウ</sup>舍<sup>シャ</sup>ノ<sup>ノ</sup>畢<sup>ヒ</sup>鉢<sup>ハツ</sup>  
羅<sup>ラ</sup>窟<sup>クツ</sup>ナリ阿<sup>ア</sup>難<sup>ナン</sup>モ<sup>モ</sup>迦<sup>カ</sup>葉<sup>エフ</sup>ノ<sup>ノ</sup>余<sup>ヨ</sup>ヲ<sup>レ</sup>承<sup>シ</sup>テ<sup>レ</sup>論<sup>ロン</sup>障<sup>シヤウ</sup>ヨリ<sup>ノ</sup>這<sup>チヤウ</sup>入<sup>ニ</sup>テ<sup>レ</sup>  
仏<sup>ブツ</sup>如<sup>ニ</sup>ク<sup>ク</sup>説<sup>セツ</sup>法<sup>ホフ</sup>ヒ<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>大<sup>ダイ</sup>衆<sup>シュウ</sup>ニ<sup>テ</sup>疑<sup>ギ</sup>ア<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>是我<sup>ノ</sup>角<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>發<sup>ハツ</sup>語<sup>コト</sup>ヲ<sup>レ</sup>置<sup>ク</sup>  
ケ<sup>リ</sup>ト<sup>ク</sup>速<sup>ソク</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>作<sup>セ</sup>ノ<sup>ノ</sup>辭<sup>ノ</sup>宜<sup>ナリ</sup>ヲ<sup>レ</sup>察<sup>ス</sup>ス<sup>ニ</sup> △論<sup>ロン</sup>語<sup>コト</sup>序<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>叙<sup>シ</sup>書<sup>ヲ</sup>  
傳<sup>デン</sup>ニ<sup>テ</sup>礼<sup>レイ</sup>記<sup>キ</sup>刪<sup>セン</sup>詩<sup>シ</sup>正<sup>テイ</sup>樂<sup>ラク</sup>△論<sup>ロン</sup>語<sup>コト</sup>述<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>作<sup>セ</sup>信<sup>シン</sup>而<sup>シテ</sup>好<sup>ク</sup>古<sup>コ</sup>之<sup>ノ</sup>編<sup>ヒン</sup>  
比<sup>ヒ</sup>於<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>之<sup>ノ</sup>鼓<sup>コ</sup>△註<sup>チュ</sup>ニ<sup>テ</sup>老<sup>ラウ</sup>鼓<sup>コ</sup>商<sup>シヤウ</sup>賢<sup>ケン</sup>夫<sup>フ</sup>夫<sup>フ</sup>見<sup>ミ</sup>大<sup>ダイ</sup>戴<sup>タイ</sup>礼<sup>レイ</sup>按<sup>ア</sup>ス<sup>ニ</sup>  
儒<sup>ニウ</sup>子<sup>シ</sup>者<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>書<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>更<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>改<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>與<sup>ラ</sup>不<sup>レ</sup>與<sup>ラ</sup>ト<sup>ス</sup>總<sup>ソウ</sup>

天定字ノ費ト云ハシ山崎老人一貫抄ニ并紀ト世本トヲ引テ  
 老鼓ハ二人ノ寓コトト云リ老字ト鼓祖トノ面影ニ寓テ古賢ヲ信  
 スル證文トフ。△孔子ニ七人ノ師ト云イ釈迦ニ七仏ノ授記ト云フ  
 ハ總テ諸經ノ取意ナリ細考ニ暇ナラス。△檀林ハ輕ノ嗤カレヲ  
 云リ室因ハ誹謗ヨリ天和比ノ常談ト成リ。△俳諧拾芥  
 此茄ヲ馬牛ト訓ス茄子キヤス甄子コストハ禪録ノ詞續ナリ△佛印  
 供養ハ詭物ノ各ニテ佛印君ト始トシ六十余帖ノ寓ヨセトラ  
 拳ラ石山ノ湖水ニ供養セシ様ナリ△其詠ハ老女ノ編  
 妻の老ノツれルアコトあり△感云ね言綺語と有り  
 捨ラハ萬式都ニ後ノ世ト云モリ此下モあり  
 ○評云けりをも全く誣謗なりと文擇一部の趣向うを  
 儒書仰拜の新論と云ハ儒文漢法の似式と為ると

へのやう自をち他とせしむるは我を建てけり  
 ちの儒佛のなまうて一を建まると地ちらふ其は弱愛  
 の自讃の似て地極めりなりと云へりとも言渡のや用  
 と云はんとも文擇のち當と云へりとも言はぬと云ふ文に  
 ね言と云へり一一部の跡も云へりなり一洋一弔一榮  
 のこの偏と云へり終果はる文の畫云と云へり一丈和の  
 優格の哀怨と云へり行杖はる文の死活と云へり  
 一我らよしの強サの筆力と云へりとも云へり此れはあ文  
 一と例に似たのさしと云へり一削り凡此れはありと云へり  
 一と云へり一射万用の詞に云へり一法一理の心の強さ  
 一と云へり南すの始り綺語の終りこれを十歳の  
 能潜神と云へり一と云へり和漢文擇と云へり各と眞名

此通用といふをくちも我々の平話なれ  
 和漢と一枚の繪圖ありとく柳子庵の文庫より  
 写し置て爾雅篇海のありとけしとけしと  
 保呂波韻一冊くくは中の増とあげむとせ

享保十二丁未秋九月如意珠目

# 書目録

洛陽寺町押小路  
 橋屋治兵衛持行

## 俳書目録

- 一本朝文鑑 假名文集 全部十卷
- 一俳諧十論 新古評論 三卷
- 一和漢文操 假名真名文 七卷

- 一新撰大和詞 日本歌語辭 全二卷
- 一十論為辨鈔 全十卷
- 一和漢百化賦 全一卷

## 俳集目録

- 一發願文 東花坊撰 一卷
- 一夕歌の秋 川入 一卷
- 一菊十歌仙 伯免 一卷
- 一梅のしとけ 吾仲 一卷
- 一東海道 何狂 二卷
- 一雞陳二百韻 蘇守 一卷

- 一七子やれ 里冬 一卷
- 一山琴集 幽今 二卷
- 一八夕暮 乃露 一卷
- 一四幅對 東恕 一卷
- 一獅子物狂 山隣 二卷
- 一淡雪集 鷺洲 一卷



|        |                           |                      |         |                           |    |
|--------|---------------------------|----------------------|---------|---------------------------|----|
| 一本朝八仙  | 二卷                        | 昇角                   | 一三千化    | <small>芭蕉翁三十三面</small> 四卷 | 蓮二 |
| 一鎌倉海道  | 二卷                        | <small>江戸</small> 干梅 | 一鱒俵     | 二卷                        | 虚白 |
| 一糸魚川   | 一卷                        | 九野                   | 一姫の式    | 一卷                        | 免路 |
| 一八鳥放生日 | <small>芭蕉翁三十三面</small> 三卷 | <small>野城</small>    | 一雪白川    | 二卷                        | 魯九 |
| 一鴨矢立   | 一卷                        | 鴻笑                   | 一文月往来   | 一卷                        | 岚枝 |
| 一桃首途   | 三卷                        | 里の                   | 一くしのすゝめ | 一卷                        | 吳天 |
| 一芋のり   | 一卷                        | 一字                   | 一六の花    | 一卷                        | 以之 |

寺町通二条下町 書肆 橘屋治兵衛 辰

